

常滑市民病院だより

発行者：病院長 鈴木 勝一
編集：病院広報委員会
第54号
2011年1月1日発行



～♪～ みんなのミニコンサート ～♪～

「新年にあたって」

常滑市の財政不安が続きます。そんな中で、ある意味では贅沢品である市民病院を存続させることは困難な道です。市から病院への繰り入れるお金は、知多市、東海市に比べて特に多くはないのですが、常滑市の財政は非常に厳しい状況です。まして新病院を建設するにはさらに資金を必要とします。

それなら今はやりの民営化、企業に経営を任せばよいのではないかという考えが浮かびます。しかし企業は儲かることしかやりません。儲かる医療を行っていくには、本来市民病院として行わなくてはならないものでも止めてしまわなくてはならない、例えば、やめてしまうものに救急医療、小児科医療などがあります。

常滑市民病院の役割として、①24時間の救急受け入れ ②中部空港の患者対応 ③地域医療の実行があります。①の救急受け入れには常勤医師が40人以上必要です。常滑はそれ以下の医師数で行っています。平日は一人の医師が当直を行っていますが、各科待機制度を守っていて、緊急の場合は30分以内に当直でなくてもすぐに対応できる体制を維持するよう努力しています。そして常滑の5万5千人の人口、その医療需要に対して40人以上の医師数は、経営面からは不合理です。儲かるには、対象人口が10万それ以上ないとやっていけません。

そんな理由で、知多・東海市民病院の合併が近く実現され、知多市役所のあたりに500床の大病院が出来ます。対象人口が10万を超える経営的に自立できる市民病院を目指しています。半田と知多東海の

— 第54号の内容 —

- * 「新年にあたって」
院 長 鈴木 勝一
- * 「常滑市民病院血管外科の診断と治療」
血管外科医師 中島 正彌
- * 「常滑市民病院シンポジウムを開催しました」
管理課
- * 「アイアンマン70.3を終えて」
耳鼻咽喉科部長 岩垣 俊憲
- * 「入所施設の概要について」
医療相談室 鬼頭 勝俊

院 長 鈴木 勝一

大病院に囲まれて常滑市民病院は存続できるのでしょうか？

市民病院としての役割、①、②、③を全うしながら存続していく為には、常滑市の規模では贅沢品である市民病院の存続に対して、常滑市民の中に市民が必要とし建てている病院という意識が生まれてくる必要があります。財政面から多くの補助が必要となるからです。

常滑市民が必要とすることを実感するためには、高齢化率の高い常滑市において、③の地域医療の充実が必要と考えます。当院では、退院したくともすぐ出来ない人達への、たんぼぼ病棟が6年前まで存在しました。急性期を過ぎて帰宅しようにも一人暮らしで生活していけない人たちへの病棟です。さらに癌、その他の重症な病気を患っていて家で治療を続けている人達への医療、開業医師との連携による緩和ケア、患者さん宅へ往診医療も今後必要となっていくでしょう。

そんな活動のなかで、市民病院の必要性が市民の中で実感してきていくことが大切です。

院長に就任していつも言ってきたことがあります。＜患者と医療従事者、お互い顔の見える、顔が分かる関係でいること。そのためいつも患者のそばに行く。病気に日曜日はない。時間外もない。そんな中に初めて地域医療は存在する。＞

今後の生きる道は、市民が必要と実感し、市民が出資する、常滑市民の病院となることと考えます。

「常滑市民病院血管外科の診断と治療」

血管外科医師 中島 正彌

早いもので2010年3月から名古屋大学病院を離れ、市民病院で小林血管外科部長のもとで当科に従事し一年近くになりました。現在、高齢化も伴い、動脈硬化を原因とする血管病が増加しておりますが、血管外科の常勤専門医がいる病院はまだ数少ないのが現状です。遅ればせながら当科で行っている治療についてお話をさせていただきます。まず代表的な疾患として、以下の病気をご存知でしょうか？

・腹部大動脈瘤

自覚症状がみられることは少ないため、腹部CTなどに発見されることが多く、動脈が局所的に瘤化(拡張)し、放置しておくことで破裂してしまう病気です。破裂してしまうと80~90%が亡くなると言われています。全身麻酔下で、大動脈瘤を人工血管に置き換える手術を施行しています。

・閉塞性動脈硬化症 (ASO)

肥満、糖尿病、喫煙などの生活習慣を基に動脈硬化により下肢の動脈が細くなってしまう病気です。症状としては、冷感、しびれ、歩行時の痛みなどがみられます。食生活の欧米化、高齢化にともなって、80年以降、3年間で30%という高い増加率でASOの患者さんが増えています。現在の推定患者数は10万人ですが、やがては百万人(日本人口の百人に一人)に達すると言われています。

・閉塞性血栓血管炎 (TAO:バージャー病)

タバコを吸う壮年男性に多くみられる、下肢の動脈がだんだんとつまり、放っておくと足先から腐ってしまう病気です。

・下肢静脈瘤 (バリックス)

太ももからふくらはぎにかけての静脈にある弁がうまく働かなくなり、血液の逆流を生じて発生する病気です。長時間の立ち仕事や、女性の妊娠、出産後に静脈瘤が大きくなるのがよくあります。弾性ストッキングなどの保存的療法に加え、ストリッピング手術(血管内にガイドワイヤーを通して静脈瘤を抜去します)や硬化療法(静脈内に硬化剤と呼ばれる薬剤を注入し、血管を閉塞させて静脈瘤を消失させます)などを行っています。

・深部静脈血栓症

全身どの静脈でもおこりうる、血栓でつまらせたことにより、足が膨れてきたり(むくみ)、違和感をおぼえたりする病気です。60歳以上の高齢者、術前後の長期臥床などが危険因子と言われています。最近では長時間の飛行機搭乗による、エコノミークラス症候群がよく知られるようになりました。肺動脈を血栓が詰まったことによる、肺塞栓症は致命的な病気です。欧米ほどではありませんが、日本でも増加傾向にあります。当院では発症経過などにより、血栓溶解療法(血栓を溶かす)、緊急で下大静脈フィルター留置などのカテーテル治療を行っています。

当院血管外科は名古屋大学血管外科と密に連携し、外科バイパス手術だけでなく、血管内治療(カテーテル治療と言われるステント留置、バルーン拡張術)を積極的に行っております。従来の手術に比べ、入院日数も明らかに少なく、合併症もほとんどないことが大きな特徴です。さらに当院には血管診療認定技師も常勤しており、四肢血圧脈波測定による血管年齢測定、超音波診断は外来にて随時行っております。検査に痛みなどはなく、血管の硬さ、つまりを評価し、診察日に説明させて頂いております。

「歩くとすぐに疲れる」「足先がしびれる」こんな症状がみられましたら整形外科だけでなく、当科の受診をお勧めします。

・Life is now!

早めの診断、治療に勝るものはありません。今年も元気に、健康を謳歌していきましょう!

「常滑市民病院シンポジウムを開催しました」

管理課

11月13日(土)午後2時から福祉会館において、常滑市民病院シンポジウム～地域医療を考える～「常滑市にとっての市民病院」を開催しました。市民病院が主催するシンポジウムは初めてのことで、当日は、一般市民、病院関係者等約130名の方にご参加いただきました。まず、前知多保健所長で、現在は特別養護老人ホーム「愛知たいようの杜」医師の高木巖様に基調講演をしていただきました。その中で、「市民にとって、市民病院はあって当たり前のことになってしまっているが、市民病院をなくすことは大きな安心をなくすことに繋がる。だが、病院を取り巻く状況は非常に厳しく市民の方の負担もあることから、皆が納得できるような形で決着を図らないといけない。」とおっしゃっていました。

次に、鈴木勝一病院長がコーディネーターを務め、片岡憲彦常滑市長ほか、基調講演をしていただいた

高木巖様、常滑市医師会長の肥田康俊様、常滑青年会議所理事長の竹内賀規様、NPO法人あかり代表の竹田加津子様、男女共同参画ネットとこなめの山中和子様の6名によるパネルディスカッションを行い、市民・医療・行政それぞれの立場から見た市民病院について討論していただきました。また、会場からのご発言いただき、活発な討論がなされました。

市民病院があって当たり前と感じている市民の方が大多数だと思いますが、客観的に見れば人口約5万5千人の本市にとっては贅沢品です。しかしながら、今後も地域医療を守っていく上では必要な施設であるという機運を高めていく一方で、財政的なことも含めて市民の皆さんとともに今後も考えていく必要があります。今回のシンポジウムがその第1歩になれば幸いです。ご意見等があれば、お気軽にお寄せください。



「アイアンマン70.3を終えて」



耳鼻咽喉科部長 岩垣 俊憲

平成22年9月19日、トライアスロンが常滑市で開催されました。アイアンマン70.3 シリーズとしては、日本で初めてのレースです。私は40歳代の部、地元枠で出場しました。炎天下、大会ボランティアに参加していただいた皆さん、お疲れ様でした。そしてありがとうございました。アイアンマン70.3は、世界に通じるビッグレースです。4月に初めて常滑での開催予定を聞いた時には、正直、無理?と思いました。が、しかし、終わってみると大成功。このようなビッグイベントを成し遂げた常滑の底力に驚きと感動を覚えました。

5月からレースに向けて体づくりを始めました。練習期間中、たくさんの方に声援をいただきました。うれしい反面かなりのプレッシャーを感じつつ、不安と緊張のなか、充実した5カ月を過ごすことができました。体が鍛えられていく中で、心もまた高揚し、仕事や家庭生活にも良い影響をあたえているよう感じました。

レース当日、潮の流れの速いスイムコース、水の透明度は低く、目印ははるか向こうのヨットの帆。(泳ぎに自信のない私は、レース前に何度もここで溺れる夢を見ました。) 後続グループの選手に抜かれて、どつかれ、蹴られて、足がつり、りんくうビーチに戻った時にはへとへとでした。バイクコース



味覚の道は、またまたハードで、激しいアップ、ダウンが遠征してきた選手をじゅうにぶんに歓迎したことと思います。地元組の私は幸い何度か試走練習をすることができ、心の準備をいただきました。最終ランの空港連絡橋からの眺めは選手たちに絶賛、ゴールの感動と達成感をさらに高めてくれました。レースを通し、沿道の皆さんの応援から勇気と力をいただきました。レースの興奮と強い日差しのもとで出会う女性たちはとても美しく見えました。

不安の中から努力して目標を果たした時の達成感はとても心地よく、がんばった自分を好きになることができました。

「入所施設の概要について」

医療相談室 鬼頭 勝俊

医療相談室には日々色々な相談に来られる患者さん、家族の方々がいらっしゃいます。その中でも一番多い相談内容は、退院後に患者さんを家に連れて帰ることが難しいというものです。そういった方々には各種病院や施設への転院や入所のお手伝いをさせて頂いています。一概に病院や施設と言っても色々な種類があり、関わる方が少ない方や初めての方には違いを把握することが難しいと思います。そのため相談に来られた方々には、まずは施設の概要から説明をさせて頂いています。今回は簡単に介護保険を利用して入所ができる、主な施設の違いを説明したいと思います。

介護老人福祉施設(特別養護老人ホーム)・・・市内ではむらさき野苑、しろやまの2施設が該当します。料金面で他施設に比べ安価に入所できることが多く、基本的には終身で入所ができます。そのため入所を希望される方が多くいらっしゃいます。しかし上記の理由から入所の申込者が多く、空きもない状況です。結果として病院入院中に申し込みをしても、退院時に入所できることはほとんどありません。

介護老人保健施設・・・市内ではさざんかの丘が該当します。元々家庭への復帰を目指す施設であるため、リハビリテーションを実施しています。また入所は原則期間限定です。そのため部屋の空きができることもあり、介護老人福祉施設に次いで安価となることが多いため、病院を退院後に入所されることが最も多い施設です。

認知症対応型共同生活介護(グループホーム)・・・市内では前山ホームらく楽、愛の家グループホームとこなめ・常滑社辺・常滑大谷の4施設が該当します。認知症のある方が少数で自立した共同生活を送る場です。自立した共同生活を送る場とありますが、最近では動きが悪い方でも対応をして頂ける施設も増えてきています。

有料老人ホーム・・・市内ではセントレアライフ常滑、サンハートライフ常滑の2施設が該当します。有料老人ホームは同じ種類の施設でも、施設によって人員配置等に大きく違いがあります。また金額的には高額になることが多いです。そのためしっかりと見学等を行い、説明を聞かれた上で自分の希望に沿う施設かどうかということ判断することが重要となってきます。

上記には記載しきれないくらい入所についての条件等もありますし例外もあります。また種類が同じでも施設によって受け入れの条件は変わってきます。そのため、入所を希望したいという方は、まずは担当のケアマネージャーや地域包括支援センター、もしくは医療相談室等で相談をして頂ければ施設の詳細がわかりやすいと思います。また施設を選択される際には内容や金銭面、距離的なこと等、何に重点を置いて探したいのかということをもとめておくと、選択をしやすくなると思います。

何かわからないこと、困ったことがある時には医療相談室にお越し下さい。医療相談室での相談は原則予約制のため、特に入院中の方は、主治医、看護師等に申し出て頂ければ予約をすることができます。



昨年の12月に開催した「みんなのミニコンサート」は病院正面玄関での開催となりました。澄みわたるハンドベルの音色や楽器の演奏に加え、きれいな歌声がホールに響き渡り、楽しいクリスマスのひと時となりました。



編集後記

昨年の12月末で野中看護部長が退職されました。あの元気な声の「おはようございます!!」がこの古い病院の中にこだましくなり寂しい限りですが、1月から看護部は新しく久米看護部長でスタートします。ウサギ年にあやかりさらなる飛躍の年になりそうです。常滑市民病院は、基本理念にかかげてある「市民から信頼され、安心して受診できる病院」であることを、職員一同が心がけております。皆様どうぞ本年もよろしくお願いたします。(編集担当)